



I-OWA マンスリー・セミナー講演より

生活者は CEO～良い社会を創る生活者主権型企業

講演:岡本 和久、レポーター:川元 由喜子

大きなテーマとして、私たち生活者があらゆる種類の組織を通じてどういう風に社会とかかわり、どうやっていい社会を創っていくかという問題があります。その流れの中で、生活者主権型企業という考え方が出てきます。企業の所有者の利益を第一に考える「株主主権型モデル」に対し、企業と直接かかわりのある顧客や従業員も含めたものが「ステークホルダー主権型モデル」。ただ、本当のステークホルダーは直接関わっている人だけじゃなくて、生活者全体なんです。その意味で「ステークホルダー主権型モデル」を更に一歩進めたものが、「生活者主権型のモデル」です。

「生活者は CEO」。CEO と言っても、最高経営責任者、Chief Executive Officer ではなくて、Consumer、Employee、Owner です。Consumer＝消費者はモノを買う人＝最終顧客ですから、最も企業に対して影響力のある強い存在です。同時に Employee＝従業員。労働を提供して、金銭と満足感を得る者として企業とかかわります。そしてあらゆる企業の使っている資金は、最終的には個人＝生活者が保有している資金ということになりますから、資本の



Owner＝資本提供者でもあるのです。生活者全体が持っている資源を寄せ集めて作り上げているもの、それが企業だとも言えるでしょう。また別の面から見ると、CEO である生活者は、毎日の生活を通して企業行動を監視、統治していく。生活者によるガバナンスですね。

企業の経営者の役割というのは、C と E と O の間の利害関係を、如何にうまくバランスをとるか



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ということになります。ある一瞬を取れば、CとEとOの間はゼロサムの関係にあります。株主として配当を上げろと言え、企業は値上げをしたり、リストラで従業員を減らしたり、必ずどこかにマイナスが出ます。しかし長期的に見れば、企業活動を通じて富が形成され、CもEもOも富を殖やしていくことが出来るのです。

生活者主権の視点からは、まず企業があるのではなくて、人が先に居て、そこに組織ができている、という発想の逆転が必要ではないでしょうか。「いい会社」とは何かと考えると、消費者にとってより良い生活を支えてくれる財・サービスの提供者であることに加え、従業員としては、適正な報酬をもらってプロとしての能力を高められる場であること、技能を発揮できて、社会貢献と自己実現の場であることでしょう。また資本の提供者としては、いい社会を創造するために資本を活用し、長期的に安定した収益をもたらしてくれる。そして自分の将来を支えるための投資機会を提供してくれる、ということになります。企業というのは、生活者がいい社会を創造するために、資源を共有しあう場、と言えるでしょう。

講演は、株主主権型の象徴としてチャップリンの「モダンタイムス」のビデオから始まり、この後は、従業員の職業倫理と企業の関係、プルーデントマン・ルールとそれを更に進めたスチュワードシップ・コード、コーポレート・ガバナンス・コードについて、また個人投資家の影響力についてなど、掘り下げた議論が続きました。